

## 第32回 研究助成

## B 実践部門・報告 V・英語能力向上をめざす教育実践

# 高等学校での内容言語統合型学習(CLIL)による 他教科と連携した授業の実践と効果の検証

研究者: 栃木県／栃木県立 宇都宮南高等学校 教諭 渡邊 聡代

《研究助言者: 和泉 伸一》

## 概要

本研究では、新学習指導要領を踏まえ、公立高等学校における英語の授業改善を目指し、他教科と連携した授業実践の過程とその効果を明らかにした。具体的に授業では、他教科の持つ内容と英語の学びを統合し思考と協学を促す、内容言語統合型学習(CLIL)により、本研究者が担当するコミュニケーション英語Ⅰの授業を現代社会および保健体育の担当教員と共に実践した。授業はコミュニケーション英語Ⅰの検定教科書を用い、現代社会との連携で2回、保健体育との連携で1回行った。それらについて①授業準備の記録、②授業観察、③生徒への質問紙調査、④連携した他教科教員へのインタビューおよび本研究による授業のふりかえり、を記録した。その結果CLILによる授業での他教科と連携した教科横断的な学びが生徒の学習動機を高め、学びが教科間でつながり、広がりのあるものとなるということが分かった。また、今後のさらなる実践と検証の必要性が挙げられた。

## 1 はじめに

高等学校において2022年度より全面実施される新学習指導要領では、「主体的・対話的で深い学び」を実現させるための授業改善が求められている(文部科学省, 2018a)。これを受けて外国語科では各科目の内容構成が一新され、「主体的・

対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を推進するため、学習過程全体を通して、知識・技能を実際のコミュニケーションにおいて活用し、思考・判断・表現することを繰り返し経るような指導の改善・充実が図られる必要がある」(文部科学省, 2018b, p.9)と提示されている。

内容言語統合型学習(Content and Language Integrated Learning, 以下CLIL)は、この「主体的・対話的で深い学び」を可能にする教育的アプローチであり、近年日本の高等学校でも実践が徐々に増えつつある。「CLILとは、ヨーロッパを起源とする外国語指導法で、言語学習と教科内容を統合させ、そこに思考活動と協学、異文化理解を取り入れ、学習者の体験的学習の促進を目的の1つとしている」(山野, 2013, p.94)。英語を使い、必然性のある多様で豊かな内容について思考しながら協働で学ぶことにより、生徒の学習動機や学習効果を高め、思考・判断・表現に必要な知識・技能としての英語の習得を目指すことができる。さらに、新学習指導要領では「コミュニケーションを図る資質・能力を育成する」という目標達成のために、指導計画作成上の配慮事項として「言語活動で扱う題材は、生徒の興味・関心に合ったものとし、国語科や地理歴史科、理科など、他の教科等で学習した内容と関連付けるなどして、英語を用いて課題解決を図る力を育成する工夫をする」(文部科学省, 2018b, p.129)とされている。吉田(2017)も、これからの日本の英語教育の方向性としてCLILの重要性を挙げ「CLILなどの考え方を基に、他教科と連動した学習内容について、

英語という道具を使って、思考、判断、そして発表することが求められる」(p.128)としている。

しかし、栃木県の公立高等学校の英語の教員は、英語の文法や語彙について熟知してはいるものの、他教科の内容について広く深く精通している訳ではない。一方、他教科の教員は、普通の授業では教科の内容を日本語で教えており、それらを英語で教える技能は持ち合わせていない場合が多い。そこで、具体的にどのようにすれば、生徒の発達段階や知的好奇心に応じた、他教科等での学びを高等学校の英語の授業に入れ、目標達成を目指すことができるのかについては、英語の教員が他教科の教員と連携して模索すると効果的であると考えた。これに基づいて本研究では、公立高等学校の「コミュニケーション英語Ⅰ」の授業において、CLILにより、他教科と連携した授業を実践し、実践の過程とその効果を明らかにする。コミュニケーション英語Ⅰの検定教科書で扱っている内容を他教科の担当教員と共有し、関連する内容を扱っている部分の授業計画について助言を受けたり、実際に授業でチームティーチングを行ったりすることが、授業改善につながるかを調べる。とりわけ、生徒の興味・関心を高め、教科横断的な知識の習得と深い学びに結び付き、授業が生徒にとって「教科等間での学びのつながりや広がりがあるもの」(文部科学省, 2018b, p.129)となるかを検証する。

## 2 研究の背景

### 2.1 CLILとは

CLILは欧州連合(以下EU)が1990年代半ばに、複言語主義、平和社会の実現を目指す言語教育政策を推進する中で発展してきた外国語教授法であり、現在EUではほとんどの加盟国の言語教育で採用されている(杉谷, 2010; 笹島, 2011)。第2言語習得理論からもその有用性が期待できる(和泉, 2016a)。池田(2016)によるとCLILは、教室での学習活動を通して知識力・思考力・語学力・協働力等の学力を養い、21世紀を生き抜く地球市民として必要な、認知的能力・社会的能力・倫

理的能力等の「21世紀型汎用能力」(池田, 2016, p.15表2参照)を育むことを目指している。これは、新学習指導要領が目指す「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「学びに向かう力・人間性」の育成も包括しているであろう。

CLILの授業では、理科や社会など他教科の題材や時事問題、国際理解など意味のある本物の内容と、習得をねらう第2言語を、4技能を通して使いながら学ぶ。内容と言語を統合し、教科教育と言語教育の両方を実現させる。加えてCLILでは、後述する「4つのC」というフレームワークを用いて計画的に思考活動と協学を入れる点が大きな特徴であり、これにより授業で英語を本物で豊かな内容を通して学び、意味ある活動の中で思考しながら活用することが可能となる。授業で体験的活動を通して、英語の「知識力」とともに思考力と表現力などの「活用力」を伸ばすことができるのである。

### 2.2 CLILの「4つのC」

CLILでは、「4つのC」と呼ばれる、Content(内容)、Communication(言語)、Cognition(思考)、Community(協学)のフレームワークに沿って、指導案を作る。池田(2011, p.5)も、CLILは4つのCを「有機的に結び付けてパッケージ化した点」が画期的であり、「この枠組みに即して教材を作り、授業案を考え、指導を行えば、相乗効果により高品質の教育が実現されるというのがCLILの要諦である」と述べている。池田(2011)によると、4つのCはそれぞれ次のようなものとされる。

- ・Content(内容)＝学習者の興味と動機付けを高める本物の内容
- ・Communication(言語)＝言語の「学び(知識の習得)」と「使う(活用)」の融合
- ・Cognition(思考)＝記憶だけでなく、分析や創造などさまざまな思考を促すタスク
- ・Community(協学)＝オーセンティックな教材を用いた4技能統合型の協同学習

和泉(2016b, p.76)は次のように述べている。「語るべき内容(Content)があるからこそ、他者

に伝える手段としての言葉 (Communication) が必要になる。また、考えるべき内容があるからこそ、思考 (Cognition) が刺激され、広がりや深まりを増していく。さらに、他者との交わり (Community) があるからこそ、コミュニケーションが重要になっていくのである。要するに、4つのCは、それぞれが支え合って存在しているが故に、教育の質の向上を掲げるCLILで大事な指針となるのである。従って、「4つのC」を適切に理解し、統合して授業に入れることが、CLILの授業を実現させる上で必要不可欠となる。

### 2.3 高等学校のCLIL実践

池田 (2011, p.10) によるとCLILには「目的」「頻度・回数」「比率」「使用言語」によるバリエーションがあり、図1のように示すことができる。

Soft CLIL	【目的】	Hard CLIL
英語教育		科目教育
Light CLIL	【頻度・回数】	Heavy CLIL
単発的／少数回		定期的／多数回
Partial CLIL	【比率】	Total CLIL
授業の一部		授業の全部
Bilingual CLIL	【使用言語】	Monolingual CLIL
英語・日本語		英語

■図1:CLILのバリエーション (池田,2011, p.10)

池田 (2013) はまた、現時点では英語の教員が他教科の内容を教える形態 (Soft CLIL) が日本の高校の教育現場には導入しやすいとしており、埼玉県立和光国際高等学校の英語教育においてSoft CLIL実践の指導助言 (山崎, 2013) を行っている。

日本の高等学校で採用するコミュニケーション英語の検定教科書は、題材やトピックは他教科の内容となっているので、すでにCLILで授業実践が可能状態である。例えば、2019年度、本研究者の所属する栃木県立宇都宮南高等学校の

コミュニケーション英語 I で採用している検定教科書 *Vivid English Communication I* (第一学習社) でも、スポーツ、歴史、日本文化、科学、健康、音楽、食物、環境問題、災害、平和など、さまざまなテーマが選定されており、理科や地歴公民科、家庭科、芸術科、保健体育科などの各教科で教えられている内容となっている。これらを「英語について」学ぶ訳読や分析的学習に使うのではなく、CLILで豊かに、体験的に学ぶようにさせたい。そして、その学びを「学びに向かう力・人間性の醸成」につなげたい。しかしながら「ことばの教師」である英語の教員にとって、主体的・対話的で深い学びを促すために踏まえる必要のある「内容」については、知識が十分でなく、自分でそれらを習得する時間も足りないことが日常的な悩みである。この点で、笹島 (2011) は埼玉県立川越女子高等学校においてCLILにより英語教師と生物の教師がティームティーチングを行った事例を紹介しているが、生物の教師が英語教師と共に授業を実践することによりCLILの授業を実現させている。また、ティームティーチングも形態は多様で、必ずしも同じ授業を協働で実施するという必要は無く、事前の授業準備で連携するなどのやり方もあると述べている。こういった教師間のさまざまな協力形態を探ることもCLIL授業を実現する上で大切な試みとなるだろう。

### 3 研究の目的と リサーチクエスト

本研究の目的は、栃木県の公立高等学校の英語教師がCLILを用いて、他教科の教師と連携した授業をどのように実践することができるか、そしてそれは生徒や教師にとってどのような効果があるかを明らかにすることである。この目的を達成するために、以下のリサーチクエストを設定し、それらに沿って実践の過程の記録とアンケート調査等の結果を示すこととした。リサーチクエストは以下の通りである。

### 1) 授業の前で

**RQ1** 他教科と連携した授業を準備するにあたり、授業の内容はどのように設定できるか

**RQ2** 授業の準備において他教科教員との連携はどのように進めるべきか

**RQ3** 内容と言語を統合するために、指導案はどのように作成するべきか

**RQ4** 役割分担はどのようにするべきか

### 2) 授業で

**RQ5** 指導案にどのくらい沿った授業ができ、どのような課題がでてくるか

**RQ6** 授業に対して生徒たちはどう反応するか

### 3) 授業の後で

**RQ7** 生徒たちは授業をどのように感じ、何を学んだのか

**RQ8** 担当教員2人は授業についてどのような感想を持つのか

## 4 研究方法

### 4.1 協力者

本研究は、栃木県立宇都宮南高等学校1学年生徒(1クラス39~40名)と、英語以外の教科を担当している教員2名の協力のもと、行われた。教員2名はそれぞれ地歴公民科、保健体育科の担当教員である。

### 4.2 研究授業の手順

研究授業は現代社会との連携で2019年10月31日と2019年11月27日、保健体育との連携で2019年12月12日に行われた。はじめは、本校のコミュニケーション英語Iで採用している検定教科書 *Vivid English Communication I* (第一学習社)で扱われている題材を基に本研究者が他教科の教員に協力を依頼した。そして、協力に同意を得

てから話し合いながら授業準備をすすめ、研究授業を実践した。研究授業の直後に授業を受けた生徒に質問紙による調査、連携した他教科教員にはインタビューによる調査を行った。

### 4.3 データ収集法と分析法

本研究では、①授業準備の記録、②授業観察、③生徒への質問紙調査、④連携した他教科教員へのインタビューおよび本研究による授業のふりかえりを行い、その結果を検証した。授業準備の記録は、授業準備の打ち合わせの際に本研究者が記録したノートや交換したメモ、授業で使用するために準備したパワーポイントを用いたスライドに基づいて記録した。これによって、RQ1~RQ4で問う、他教科と連携した授業の準備における授業内容の設定、他教科教員との連携、指導案作成、そして教員間の役割分担について明らかにしようとした。授業観察は1台のビデオカメラにより記録されたデータにより行われたが、RQ5とRQ6で問う、実際の授業の進行と課題、及び生徒の反応を明らかにしようとした。生徒への質問紙調査では、授業に対する生徒の感想と意見を5段階のリッカート尺度を使った選択回答式10項目と自由記述回答式4項目を通して尋ねた。選択回答式アンケートで実際に使われた質問は後述の5.2で示す表1~3にある通りである。選択回答式アンケートの分析を通して、RQ6にある授業に対しての生徒たちの反応、記述式アンケートへの回答をもとに、RQ7の生徒たちの学びと意見について明らかにしようとした。研究授業後に行った他教科教員に対するインタビューと本研究者のふりかえりをもとに、RQ8にある担当教員の授業についての感想を明らかにしようとした。

## 5 結果

### 5.1 研究授業

実施した3回の研究授業について授業の準備と実践した授業の実際について、経過に沿って説明する。研究授業は準備段階から日本語は使わ

ないことを前提にし、基本すべて英語を用いて行ったが、授業中に生徒が分からないであろうと予測された単語が出てきた場合や指示の意味を正確に伝えたい場合、教材として用いた動画に日本語が入っていた場合、予定していなかったことを本研究以外の教師が伝えることになった場合は、日本語の使用があった。

### 5.1.1 現代社会と連携した授業

現代社会と連携した授業は、2回行った。1回目は2019年10月31日に行い、そこでの反省を踏まえて、同じ内容で発問を改善した2回目の授業を11月27日に実施した。これらの授業について、授業の準備、1回目の授業、2回目の授業の順に述べる。

連携したいと考えた現代社会担当のI教諭は、本校の学習指導部長でもあり、教科横断的な学びを推奨している。そのため研究授業を実施する以前に、教科書のLesson 3: Look Cool on Your Streetsを扱う際に、ファッションから児童労働を考える授業をI教諭と連携して実践したことがあった。今回、教科書の題材の中からI教諭と連携することで合意した題材は、Lesson 8: The Sphinx in Dangerであった。この課では、生活排水の増加やダム建設により塩害が広がり、そのために崩れつつあるエジプトのスフィンクスが題材として取り上げられている。前回ファッションをテーマにした授業を実施した際は、本研究は全て英語を使って授業をしたが、I教諭は

授業の後半部分は日本語で授業を行った。しかし、その授業の前半の様子から、準備をしていればI教諭の英語の発話が生徒に十分伝わると分かったので、今回の授業はI教諭に全て英語を使って授業をしていただくこととした。それはI教諭には大きな挑戦だった様子である。

授業はLesson 8を扱う最初の授業であり、大半の生徒はまだ教科書を読んでいないことを前提に計画した。I教諭と授業準備のための打ち合わせは全部で主に5回行った。1回目は、I教諭に教科書Lesson 8の内容を伝え、話し合いにより授業で扱うテーマを「開発と環境」ということに決めた。2回目の打ち合わせでは、「開発と環境」を考えさせるためにイースター島の話が興味深いので扱いたいとの提案がI教諭からあった。そこで、次の打ち合わせまでに授業で使うパワーポイントによるスライドを本研究者が作成し、I教諭に見ていただくこととした。3回目はそのスライドを見てもらい、提示の順番を修正し、生徒への問いをどうするか話し合った。また、イースター島の話はI教諭が紙芝居を作成し、伝えたいことを本研究者が訳し、I教諭がそれを音読して生徒に聞かせる形態を取ることにした。I教諭が発話して生徒が分かるように英語はできるだけやさしいものを使うよう心掛けた。4回目はスライドを確認しながら再度生徒への問いを2人で考えた。最終的に、What can we do to make this world better?で終わることとした。授業前日となる5

Content (内容)	Communication (言語)	Cognition (思考)	Community /Culture (協学/文化)
(宣言的知識) エジプトのスフィンクスやイースター島の歴史について知り、開発と環境破壊について知識を得る。	(言語知識) ・ 語彙(世界遺産) ・ 表現(関係副詞where)	(低次思考力) 出来事やスピーチを理解する。	(協同学習) ・ ペア ・ グループ ・ 一斉
(手続的知識) 開発の必要性と環境保全について、自分がやるべきことを考える。	(言語技能) ・ 聞く ・ 読む ・ 話す ・ 書く	(高次思考力) これまでの環境破壊を分析する。 自分の考えについて論じる。	(国際理解) 世界の開発や環境問題に目を向ける。

■ 図2: CLILの授業設計(現代社会との連携:1回目)



回目には、指導案と授業手順を確認した。

授業1回目は、2019年10月31日(木)5時間目(13:40-14:20)に、第1学年、出席者39人の学級で行われた。また、本研究の指導助言者である上智大学和泉伸一教授と、本研究がCLILについて普段指導助言いただいている宇都宮大学山野有紀准教授及び山野研究室ゼミ生に授業観察をしていただく形で行われた。池田(2016, p.17)のフレームワークによるCLILの授業設計図は図2のとおりである。

授業では、I教諭の紹介後、前の週にI教諭が修学旅行へ行ったことを伝え、Kyoto is the city where people can enjoy many beautiful temples and shrines.と、関係副詞を使った文を導入した。その後、スライドに沿って本研究がDo you like traveling? Where would you like to visit? Is it a World Heritage Site?と生徒に問いかけた上で、I教諭はイースター島に行きたいこと、本研究はエジプトに行きたいことを場所の写真と共に示した。エジプトではスフィンクスのすぐ近くにファストフード店がある様子や、スフィンクスはその上にライオンの像があったかもしれないという説があることなども紹介した。次に、台風で栃木県が被害を受けた様子や、太陽光パネルで鉄砲水が出るようになってしまった場所があることを写真と共に紹介し、Do you think it is OK?と生徒たちに問いかけた。それから、I教諭が紙芝居でイースター島の歴史を紹介した。緑豊かであったイ-

スター島が、人間が原因で荒廃していく様子と、それは現代の地球全体にも起こり得ることかもしれないということをI教諭が英語で説明した。本研究者は生徒の様子を見ながら、難しいと思われるところは説明を加えたり、くりかえし説明したりした。これにより、「開発と環境保全」が共存しにくい現実を理解した上で、最後にWhat can we do to make this world better?という問いについて生徒たちはグループで考え、発表した。“We can reduce plastics and do volunteer activities.”や“We must make situation environment-friendly.”のような意見が生徒たちから引き出せた。このグループワークで50分の授業は終了した。

授業後、授業観察者から助言・感想等をいただいたが、その中で特に、授業に多くを盛り込み過ぎて、話の流れが分かりづらく、授業最後の発問も大きく漠然としたものになってしまっ、全体としてまとまりのない授業になってしまっていることが指摘された。さまざまな内容を授業で扱いたいと欲張ったことが裏目に出た形となってしまった。そこで再度、スライドや発問を吟味して授業計画を練り直し、2回目の授業を1回目実施の学級とは別の学級で実施した。

授業2回目は2019年11月27日(水)5時間目(13:40-14:20)に、第1学年、出席者40名の学級で行われた。CLILの授業設計は図3のとおりで、下線部が1回目の反省から改善したところで

Content (内容)	Communication (言語)	Cognition (思考)	Community / Culture (協学/文化)
(宣言的知識) エジプトのスフィンクスやイースター島の歴史について推測しながら知識を得る。	(言語知識) ・ 語彙(世界遺産) ・ 表現(関係副詞where)	(低次思考力) 出来事やスピーチを理解する。	(協同学習) ・ ペア ・ グループ ・ 一斉
(手続的知識) <u>歴史についての知識を生かし、これからの社会がどうあるべきか考える。</u>	(言語技能) ・ 聞く ・ 読む ・ 話す ・ 書く	(高次思考力) <u>歴史上の出来事を分析する。</u> 自分の考えについて論じる。	(国際理解) 世界の開発や環境問題に目を向ける。

■ 図3: CLILの授業設計(現代社会との連携:2回目)

ある。

前半の手順は1回目と同様に行きたい場所を話題に関係副詞を導入し、I教諭がイースター島に、本研究者がエジプトに行きたいことを伝えた。その後は台風や太陽光パネルの話題は省き、代わりにエジプトの歴史を示し、今は砂漠でも昔は緑が広がっていたことを紹介した。そしてその後、現在のイースター島の写真を使い、モアイ像のみが残され、人間が誰も住んでいないことに触れ、What do you think had happened on this island? と問いかけ、グループで考えて意見をまとめ、発表させた。生徒たちからは “People cut a lot of trees to carry Moai. So the island’s nature was broken.” や “Rats ate a lot of plants. It broke nature. People brought rats by ship.” のような意見が出された。その後、I教諭がイースター島の歴史についての紙芝居を紹介し、最後の場面に移る前に、What do you think will come next? と発問した。紙芝居の最後の場面は、現代の都市部でビルが乱立する様子が描かれており、これがモアイ像の残されていたイースター島の様子と重なると言っている人がいるが、そう思うか問いかける場面となっている。その後、I教諭が紙芝居の次の場面に何を描いたかをグループで考えさせ、発表の時間を持つとしたが、授業終了時間が迫っていたので、発表は省き、紙芝居の最後の場面を紹介して終わる形となった。

### 5.1.2 保健体育と連携した授業

Lesson 1: You Can Do Something for the Olympicsについては、生徒たちは本校に入学してすぐの4月に学んだが、保健体育科のT教諭と連携したいと考え、復習・まとめという位置づけで12月にもう一度扱うこととした。T教諭はバドミントン競技の国際審判の資格があり、世界中で活躍しており、審判として必要な英語力を持っている。また、ロンドンオリンピックのバドミントン競技で起こった、無気力試合の審判の経験を持っているので、そのことについて教えていただき、その是非について生徒に考えさせることでCLILの授業を実現できると考えた。そこでまず保健体育の教科書を借りて、オリンピックの扱われている部分について本研究者が学んだ。保健体育の教科書では、オリンピックムーブメントやオリンピックの起源、現在のオリンピックの在り方などが扱われていた。英語Iの教科書では2020年に東京オリンピックが開催されることや、古代オリンピックと現代オリンピックの違い、英語を学んでボランティアをしよう、といった内容が扱われているのだが、それらよりは保健体育の教科書の内容を中心に授業で扱った方が生徒の興味関心を高められると考えた。T教諭の多忙なことを考えると、じっくり打ち合わせの時間は持てないことが予測されたので、3回に分けて必要なことを教えてもらったり、パワーポイントのスライドに必要な資料を提供していただいたりすることにした。1

Content (内容)	Communication (言語)	Cognition (思考)	Community /Culture (協学/文化)
(宣言的知識) オリンピックの歴史や種目、 オリンピズムについて知識 を得る。	(言語知識) ・語彙(スポーツ) ・表現(助動詞can)	(低次思考力) 説明やスピーチを理解する。	(協同学習) ・ペア ・グループ ・一斉
(手続的知識) 2020年の東京オリンピック に向けて、自分がやるべき ことを考える。	(言語技能) ・聞く ・読む ・話す ・書く	(高次思考力) これまでのオリンピックの 歴史を分析する。 自分の考えについて論じる。	(国際理解) オリンピックムーブメント や世界平和に目を向ける。

■図4: CLILの授業設計(保健体育との連携)

回目は3分ほど職員室で立ち話をするような状態であったが、保健体育の教科書でオリンピックについて扱われている内容について伺った。クーベルタン男爵が平和を理念の1つに掲げ、古代オリンピックを復活させたこと、しかし、現在に至るまで2度の大戦によってオリンピックが中止になってしまったこと、現在でもオリンピックにはお金がかかり、国の経済事情に大きく左右されている側面があること、そしてその解決策の1つとして、世界のスポーツエリートを育てるユースオリンピックがあること、ユースオリンピックでは若者に対してスポーツだけでなく倫理的な教育も行うことを教えてもらった。また、T教諭がロンドンオリンピックで撮影した写真や、無気力試合を扱ったニュース番組の動画のデータを提供してもらった。2回目は本研究者が1回目の打ち合わせを基にパワーポイントを用いて授業用スライドを作成し、体育教官室でT教諭に見てもらい、内容について話し合った。T教諭はそのスライドを持ち帰り、生徒に伝える内容を自ら英語で入力した。3回目は授業直前に授業で用いる機材について簡単に調整した。

授業は2019年12月12日(木)6時間目(14:40-15:20)に、第1学年、出席者37名の学級で行われた。CLILの授業設計は図4のとおりである。

授業の前半は全て本研究者が行った。その間、T教諭は教室の後ろから生徒たちの様子を観察していた。授業の最初では本研究者がDo you like sports? What sport do you like? と問い、生徒とやりとりをした後、自分が好きなスポーツがオリンピック種目になっているか確認してみよう、として、オリンピック競技種目を確認した。その後、人々は何故スポーツをするのか、オリンピックは何のためにあるのかを問いかけ、スポーツには世界と未来を変える力があるということをおさえた。さらに、教科書で扱った古代と近代オリンピックについて簡単に触れ、オリムピズムとオリムピクムーブメント、2つの大戦下ではオリンピックが中止になったことについてスライドを使いやり取りをしながら確認した。ここで、T教諭に登場していただいた。ロンドンオリンピックのバドミントン審判団の写真のスライドで示し、T教諭がWhere am I? と生徒に問いかけ、皆で写真の中にT教

諭の顔を見つけた。ロンドンオリンピックで開会式のチケットが20万円もしたこと、T教諭は審判なのでそれを支払わずに開会式を観ることができたことを紹介した後、バドミントンの試合の写真を見せた。Something very sad was happening. とT教諭が述べた後、無気力試合についてのニュース動画を見せた。この試合によって中国と韓国の選手は失格となり、それによって日本が銀メダルを取れたことも合わせて伝えた。この後、T教諭からWhy do you play sports? Why do you watch sports? という問いかけがあった。T教諭は続けてIt is very important for players to win. But thanks to the support of many fans, players can play. Fans can get energy, joy and excitement from players. Badminton, the Olympics are not just for players. と述べた。そしてこの後、生徒たちはグループでWhat can we do for Olympics? という問いに対してグループで考え、発表した。生徒たちからは“We can learn about the Olympics.” や “We can cheer, support, and believe athletes.”のような意見がでた。最後に時間が3分程余ったので、T教諭からユースオリンピックの理念について日本語で講義をしていただき、授業を終えた。

## 5.2 生徒による質問紙回答結果

研究授業後にアンケートを実施し、以下のような結果が得られた。

### 5.2.1 選択回答式アンケート結果

選択回答式アンケートの結果は、表1~3の通りである。



■表1: 選択回答式アンケート結果(現代社会:1回目)

		平均	標準偏差
①	授業の内容に興味を持てた。	4.36	.66
②	授業の内容が分かった。	4.33	.69
③	先生の言っている英語が分かった。	3.87	.79
④	今までに学んだ英語が役に立った。	4.10	.63
⑤	内容について考え、自分の意見を持つことができた。	4.08	.62
⑥	伝えたいことを英語で何と言ったら良いか、考えることができた。	3.79	.85
⑦	伝えたいことがあったが、英語にすることができなかった。	3.59	1.05
⑧	自分の意見などを英語で何と言えよいかさらに知りたくなった。	3.97	.82
⑨	クラスの一員として、この授業に参加することができた。	4.32	.62
⑩	クラスメイトと協力してグループの意見をまとめることができた。	4.30	.73

■表2: 選択回答式アンケート結果(現代社会:2回目)

		平均	標準偏差
①	授業の内容に興味を持てた。	4.73	.63
②	授業の内容が分かった。	4.65	.53
③	先生の言っている英語が分かった。	4.30	.51
④	今までに学んだ英語が役に立った。	4.25	.58
⑤	内容について考え、自分の意見を持つことができた。	4.40	.66
⑥	伝えたいことを英語で何と言ったら良いか、考えることができた。	4.28	.63
⑦	伝えたいことがあったが、英語にすることができなかった。	3.13	1.08
⑧	自分の意見などを英語で何と言えよいかさらに知りたくなった。	4.28	.55
⑨	クラスの一員として、この授業に参加することができた。	4.48	.55
⑩	クラスメイトと協力してグループの意見をまとめることができた。	4.40	.73

■表3: 選択回答式アンケート結果(保健体育)

		平均	標準偏差
①	授業の内容に興味を持てた。	4.38	.63
②	授業の内容が分かった。	4.41	.59
③	先生の言っている英語が分かった。	4.08	.67
④	今までに学んだ英語が役に立った。	4.14	.58
⑤	内容について考え、自分の意見を持つことができた。	4.11	.80
⑥	伝えたいことを英語で何と言ったら良いか、考えることができた。	4.16	.72
⑦	伝えたいことがあったが、英語にすることができなかった。	3.46	.95
⑧	自分の意見などを英語で何と言えよいかさらに知りたくなった。	4.00	.81
⑨	クラスの一員として、この授業に参加することができた。	4.11	.69
⑩	クラスメイトと協力してグループの意見をまとめることができた。	4.22	.84

### 5.2.2 記述回答式アンケート結果

次に示すのは、記述回答式アンケートの結果である。記述回答式アンケートでは、

- ① この授業で扱った内容について、自分が学んだと思うこと、または考えたことは何ですか。
- ② この授業で学んだ英語はどんなものですか。(カタカナでも良いので書いてください。)
- ③ 現代社会(保健体育)の内容を英語で学ぶことについて、どう思いますか。
- ④ この授業の感想を書いてください。(先生たちへのアドバイスもお願いします!)

の4つの質問に回答を求めた。

### 現代社会と連携した授業：1回目

①の質問に対しては、「自分が思っているより環境問題が深刻化していること、解決するためには多くの時間と人の力が必要であること」「これから私たちが生きる世界の問題だから、しっかり考えないといけないと思った」など、環境問題について、または自分にできることについて記述したものが32回答あった。②の質問に対しては、protect, environment, emissionなど、内容を表現するために使った語句を挙げたものが32回答と大半を占めた。文を挙げたものは3回答で、「We can ～」「We should protect forest」「We can clean オール over the world.」であった。③の質問に対しては、「日本語では難しいと感じることが英語ではわかりやすく感じた」「今まで習った英単語がたくさん出てきたので社会の授業を英語で受けるのはとても楽しかったです」「一石二鳥だと思いました」「英語を理解しようとするからとても印象に残った」「あまり現社は好きで無くても興味が持てた」など、良いと評価するものが31回答あった。一方で、「理解できないところもあったので日本語の方がよいと思った」「難しい単語が多い」「分からない単語が多く、調べなければならないので少し大変だと思った」など、難しさを挙げたものが5回答あった。④の質問に対しては、良かったとする回答が32回答得られた。理由としては、「英語で現代社会の授業をやるという斬新な考えに驚いた」「1回の授業で2つの教科を学習することは、難しいが興味が湧く」など、他教科との連携について挙げているものが10回答、「絵とか写真とかが多くてとても分かりやすかったです！楽しかったです！」「紙芝居がとても面白く、わかりやすかった」など、教材の工夫について挙げているものが9回答、「自分なりに世界のためになることをしっかり考えることができたのでよかった」「自分の意見を考えることができてとても楽しかった」など、思考が良かったとするものが7回答あった。

### 現代社会と連携した授業：2回目

①の質問に対しては、「今の社会もイースター島のモアイの話と同じで、将来、建物だけが残っ

て人間がいなくなるのではないかという話で自分もそうかもしれないと感じた」「イースター島の歴史の凄絶さに驚かされた」など、具体的な内容や自分の意見についての回答が37回答あった。また、協学を通して他の生徒やグループの意見が聞けて良かったとする記述も3回答見られた。②の質問に対しては、deforestation, disaster, sinkなど、内容を表現するために使った語句を挙げたものが34回答であった。③の質問に対しては、「自分で考えたことを英語にする力がついて、とてもおもしろいと思った」「普段学んでいる英語を応用して使うことができるのでいいと思う」「いつもの授業よりも深く考えることができた。自分の考えをもつことができた」「興味が持てた。言葉が分からない分、ちゃんと聞こうと思った！」など、良いと評価するものが37回答あった。一方で、難しいというものが3回答あったが、「英語で学んでいるのでわかりにくくなった分、理解しようとしたと思う。」といった回答も3あった。最後に、④の質問について、良かったとする回答が37回答得られ、その理由として「モアイの謎について考えることができた。もっと深く知りたいなと思った。」など、思考が良かったとするものが9回答あり、「みんなと考えて、発表したり、それを聞いたりすることはとてもおもしろかった」など、協学が良かったというものも9回答あった。さらに、「2つの教科が組み合わさったことで、余計に難しくなるかと思ったが、この方が理解しやすかった」など、教科横断の試みについて挙げているものが7回答、「先生の絵やテレビの画面もあり、とても楽しく分かりやすかった」など、教材の工夫について挙げているものが4回答あった。

### 保健体育と連携した授業

①の質問に対して、「スポーツは世界や人を変える力があること」「選手の無気力試合は他の人の不幸にもなってしまうということ。スポーツマンシップは大事ということ」「オリンピックがただのスポーツ大会ではないこと」など、内容について、または内容を踏まえて自分で考えたことを述べた回答を36回答得た。②の質問に対しては、athlete, cheer, Youth Olympicsなど、内容を表現するために使った語句を挙げたものが36回答

と大半を占めた。③の質問に対しては、「英語を学ぶと同時にオリンピックについて考えることができ、一石二鳥で良い時間になった」「保健体育は好きなので、またやりたい」「英語でこのような内容を学ぶことは多少なりとも将来につながると思う」など、良いと評価するものが37回答あった。一方、「頭が疲れる」「難しい単語をたくさん覚えなれないといけないと思う」など、難しいとしたものが3回答あったが、「身近なことを英語で表すのは難しいけどすごく楽しかった」と、難しいが良いとしたものが1回答あった。④の質問に対しては、良かったとする回答が33回答得られた。その理由として、「英語×保健という2つの教科がとても合っていて、面白かった」「1つの科目を集中してやることも必要だが、この先の将来に向けて2科目をつなげて行っていくことも大切だと思う」など、教科横断の試みについて挙げているものが11回答、「テレビや写真映像を使った説明で分かりやすかったし楽しかった」など、教材の工夫について挙げているものが5回答、「いつもとは違い、考える時間の多い授業で楽しかった。」など、思考が良かったとするものが4回答、「スポーツについての内容だったので、興味をもって聞くことができた」など、内容についてのものが6回答、「テレビで映像を見たり話し合いしたりするのが良かった」と、教材に加え協学が良かったというものが1回答あった。また、特徴的だったこととして、「Lesson1 でやったような内容をより深く学ぶことができ、ためになった」「Lesson1 で習った事を生かして授業をうけることができて良かった」と、既習事項の応用に意義を見出している回答が2回答あった。

### 5.3 指導者のふりかえり

授業後のインタビューでは、現代社会で連携した1教諭からは示唆に富んだ感想をいただいた。普段の現代社会の授業では、教師が説明をし過ぎてしまったり、引き出したい答えに誘導し過ぎてしまったりすることがあるそうである。一方で英語科と連携した授業では、英語が堪能では無いからこそ英語教師の力を借りながら何とかしてゆっくり粘り強く伝えようとしたり、生徒が表現しようとするのを待ったりできたということで

ある。また、日本語ではなかなか自分の意見が言えなかった生徒が、英語で発言している様子が観察できるなど、英語の持つ特性が効果を発揮しているように思えたそうである。加えて、まずはやってみないと分からないので、やってみることが大切で、やった後で改善点や以後の対策を話し合うことが授業力の向上につながるということを実感できたということであった。さらに、今後はこのように単発ではなく、他の科目とも体系的に連携を考え、教科間での学びが生徒にとってもっとダイナミックにつながりや広がりのあるものとなるよう工夫していくべきだと考えているということであった。

保健体育で連携したT教諭からも、前向きな感想をいただいた。T教諭にとってはスポーツの楽しさや素晴らしさを生徒に伝えることが最も大切なことなので、その手段が英語でも日本語でも、実際に競技を体験することでも、どれでも自分にとって同様に達成できることが重要であるということであった。また、今回英語科と連携したことにより、スライドや動画を通して英語で段階を踏んで分かりやすく自分の体験を伝え、生徒に深く考えさせる機会を持たせたことは喜ばしいことであったということである。

本研究者が他教科と連携した授業をCLILで実践して最も意義があると感じたことは、言語の教師でありながらも、内容を生徒に伝え、考えさせたいという自身のモチベーションが高まったことである。これまで、イースター島やオリンピックについてあまり深く知らず、生徒に伝えたいと思うほどの情熱が湧かずにいた。しかし、現代社会と保健体育の教師から伝えたい、考えさせたいという熱意を強く感じ、歴史の現代社会とのつながりやオリンピックの奥深さなど、興味深い内容を具体的に提示していただいたので、本研究者の授業準備と授業を実践する意欲が高まった。また、授業中は内容を伝えることに意識が向くので、教師も生徒も自分が発話する英語の正確さにあまりこだわらず、伝えるためにたくさん話すことができた。これは、訳読や文法等についての分析的学習を行っている授業では実現が難しいと思われる。一方で課題に感じたことは、言語指導の内容の中への組み入れである。内容についての話が進み、生徒の発話が促されている時に授業の流

れを損なってしまう恐れがあったため、言語についての指導やフィードバックの時間を十分に取ることができなかった。英語の授業で他教科と連携したので、50分の授業の中での時間配分や、年間や単元ごとの指導計画の中に言語指導を上手く組み入れることを周到に準備したい。

## 6 考察

結果を踏まえて、RQ1からRQ8について考察する。

### RQ1:

他教科と連携した授業を準備するにあたり、授業の内容はどのように設定できるか

研究授業はどの授業もコミュニケーション英語Ⅰの授業で行った。従って、授業の内容は、検定教科書で扱っている内容と関連したものを扱うことを前提とした。

現代社会と連携した授業では、本研究者がコミュニケーション英語Ⅰの検定教科書をI教諭に手渡し、世界史を専門とするI教諭から、Lesson 8: The Sphinx in Danger で連携したいという要望をいただいた。この結果から言えることは、他教科の教員にまずは英語の教科書を見てもらい、連携しやすい内容を見つけていただくことで授業の内容設定をすることができるということである。

一方で、保健体育と連携した授業では、T教諭が以前に行ったロンドンオリンピックについての日本語での講演会を本研究者が聞いていたので、Lesson 1: You Can Do Something for the Olympics の内容を扱うことに決めてからT教諭に連携をお願いした。英語担当の教員が扱う内容をあらかじめ決めてから、他教科の教員にその内容をお願いするという形でも内容設定をすることができる。さらに、保健体育の教科書を借りてオリンピックについて本研究者が学んだことにより、英語の教科書と共通する内容や関連性を授業で扱うことができたので、他教科の教員に扱う内容について、他教科で使用しているテキストを紹介していただき、英語の教員が英語の検定教

科書と他教科のテキストで関連しているところを見つけ、授業で扱う内容として設定することもできると言えるであろう。

### RQ2:

授業の準備において他教科教員との連携はどのように進めるべきか

本校の教員はいつもとても忙しい。普段担当している授業に加えて本研究者と連携した授業をしていただくので、大きな負担にならないよう注意して授業の準備を進めた。また、他教科教員の英語発話力に応じて授業準備を進めることを約束して授業準備を進めることで、英語の授業に教員として参加する心理的な負担を軽減するよう努めた。

現代社会と連携した授業の準備は、I教諭が教科横断的な学びを深める必要性を感じていたこともあり、本研究者からの打ち合わせの要望に積極的に応じてくださり、授業を改善して同じ内容を扱って2回目の授業も実践できた。1回目の授業の前にも十分に打ち合わせをしたつもりだったが、足りなかった。この結果から、可能な限り打ち合わせは十分に行い、他教科教員との連携を進めていくべきだと言えることが言える。

保健体育と連携した授業の準備では、T教諭がロンドンオリンピックで撮った写真や、試合についてのニュース動画など、オーセンティックな素材が豊富にあった。その中から授業の流れにあったものを本研究者が選び、授業で使うスライドに教材として組み込んでいった。また、T教諭は多忙な方であったが、授業の合間などは快く本研究者の質問や打ち合わせの要請に応じて下さった。この結果から言えることは、授業でやりたい内容がはっきり決まってい、英語の教員がそれを把握している場合は、密に打ち合わせをしながら授業を作り上げる形態ではなく、英語の教員の方がまず計画を練って、分からない細かいところを他教科の教員から助言をいただきながら進めていくという方法を取ることできるということである。

**RQ3:**  
内容と言語を統合するために、指導案はどのように作成すべきか

豊かな内容についての学習を英語学習と結び付けるために、それぞれの授業において指導案作成の段階で Genesee & Hamayan (2016, p.166) に倣い、内容についての目標は現代社会および保健体育の教員が、言語についての目標は英語の教員である本研究者が設定した。

現代社会と連携した授業では、本課の言語材料である関係副詞は、行った場所や行ってみたい場所について関係副詞 where を用いた文にして、スライドで3例示し、板書もして導入した。また、内容豊かな英語を生徒に理解させるために、紙芝居をするというアイデアはI教諭が出した。I教諭が文の原案と絵の部分をつくり、本研究者が英訳して制作した。さらに、2回目の授業では問いの工夫を行い、生徒の思考を深める流れを作ることができた。この結果から、他教科の持つ豊かな内容を英語教育に活用するには、英語教員と他教科の教員でアイデアを出し合い、それを英語の教員がCLILの「4つのC」を意識して精査すべきだと言える。また、個々の活動が独立してしまい授業の流れが滞ってしまわないよう、活動を授業に「編み込む (interwoven) (Coyle, Hood, & Marsh, 2010)」ことが重要であると考えられる。

保健体育と連携した授業は、4月に学んだ Lesson 1 のまとめの授業として12月に行ったこともあり、Lesson 1全体で使用されている助動詞 can の定着を目標としたが、生徒は概ねできるようになっていた。生徒への問いが What can we do for the Olympics? であったこともあり、生徒の表現の中に助動詞 can があることが多かった。この結果から、定着を促したい文法事項や言語材料は、難易度が低い場合や定着を促したい場合は、生徒が目目して使用することになるので、問いの中に組み込むと有効であると考えられる。また、ロンドンオリンピックの無気力試合のニュースについての動画は日本語のものであったので、生徒はその後T教諭が使用した disqualified や participate などの語彙の意味を予測することが

できていた。この結果から、生徒の英語での理解を助けるために、効果的な日本語の使用も考えて指導案を作成すべきであるということが言えるであろう。

**RQ4:**  
役割分担はどのようにすべきか

他教科の教員と連携してCLILで授業を進めるにあたり、他教科の教員との打ち合わせで話し合っ て役割分担を決めたが、その際特に他教科の教員の英語運用に対する自信の度合いを配慮した。

現代社会と連携した授業では、I教諭は英語の正確さには自信がなかったが、英語を授業中に発話することに対しては前向きであった。そのため、紙芝居に必要な英語を書いておいて、それを音読していただいた。この結果から、他教科の教員が、授業中英語を発話し、内容の教員として授業に関わりたい意欲がある場合は、事前に英語を用意し、それを授業で示す役割を担ってもらうことができると言える。

保健体育と連携した授業では、T教諭は英語を発話することに慣れており、自分でスライドに発話する台詞を英語で入力して準備できていた。従って、はじめはスライドに沿って本研究者が発話して授業を進め、途中T教諭に話し始めていただく場面を決めておき、そこからはT教諭に中心となって話していただいた。生徒もT教諭が話す英語に感動していた。この結果から、他教科の教員が比較的英語を話せる場合は事前に役割分担を決めておき、英語の教員は他教科の教員が中心となって話す場面では生徒の理解を見取りながら、語彙の難易度によっては介入して説明を加えるなど、補助的な役割を果たすと良いということが言えるであろう。



**RQ5:**

指導案にどのくらい沿った授業ができ、  
どのような課題がでてくるか

どの研究授業においても、授業のはじめに warm up として生徒に身近で簡単な質問をしてインタラクションを行った。その後、他教科の教員から教えていただいた内容を、主にパワーポイントのスライドを使ってインタラクションをしながら示していった。そしてどの授業でも必ず、CLIL の「4つのC」の Cognition (思考) を促す問いを生徒に投げかけた。また、授業の内容理解を促すために、現代社会と連携した授業では、紙芝居を使った。保健体育と連携した授業では、動画を使った。これらの教材はいずれも、生徒の思考を促し、協学で問いへの答えを考え出すために有用であった。この結果から、授業は事前に考えていた指導案に概ね沿った展開で進められたと言えるであろう。

課題となったことは、他教科の教師が話す英語をどのように英語教師が生徒に分かるように補助するかである。他教科の教師が話す英語が生徒に伝わっていないと思われる場合、英語教師が介入して難易度の低い表現に言い換えをしたり説明を加えたり、時には日本語で意味を言ったりすることが必要である。しかし、どのタイミングでどのくらいの時間を取って介入するか、またどのようにしたら授業の流れを損なわず介入できるか、今後の研究と熟練が必要である。

**RQ6:**

授業に対して生徒たちはどう反応するか

ビデオ録画の観察からは、どの授業でも、生徒たちは積極的に活動に参加していたことが分かる。教師の発話する英語については、特に他教科の教師の言うことを理解しようとする姿勢が見られた。また、問いに対する答えをグループで考え、発表する活動では、生徒がそれぞれ考え、グループに何らかの貢献をしていた。このことから、CLIL による他教科と連携した

授業実践により、生徒の積極的な授業参加や学び合いを促進できるということができよう。

5.2.1の選択回答式アンケート結果からは、生徒は概ね、授業の内容に興味を持って、内容が分かったようであると分かる。また、教員の発話する英語を理解し、今までに学んだ英語を応用する機会を得ていたと言えそうである。さらに、内容について考え、自分の意見を持つことができたかということについて、また、伝えたいことを英語で何と言ったら良いか考えることができたかについても、ほとんどの生徒ができていたようである。一方で、伝えたいことがあったが、英語にすることができなかった生徒は本研究者が予想していたほど多くなかった。しかし、自分の意見などを英語で何と言えよいかさらに知りたくなったという生徒は多かったため、授業中は既存の知識で何とかコミュニケーションを図っていたということがうかがえる。クラスの一人として、この授業に参加することができたかということ、クラスメイトと協力してグループの意見をまとめることができたかということについても、よくできていたということが言えそうである。つまり、CLIL による他教科と連携した授業で「4つのC」がそれぞれ具現化され、それを通して生徒たちは教科横断的な学びを深めることができていたということが言えよう。

**RQ7:**

生徒たちは授業をどのように感じ、  
何を学んだのか

記述回答式アンケート結果から、生徒たちは CLIL による他教科と連携した授業を良いと感じ、内容と言語の両方を学んだということが分かる。

授業の内容についての質問に対する結果からは、生徒たちが授業中、知識の確認や吸収をし、考えを深めたり自分の意見を持ったりすることができていたことが分かる。特に注目したいのは現代社会と連携した授業の1回目と2回目で生徒の記述回答の内容が異なっていることである。2つの授業で扱った題材は同じものであっ

たが、展開と発問が異なっていた。これを反映して、1回目では環境問題について、または自分について記述したものが多く、2回目では具体的な内容について、または自分の意見についての回答が多かった。本研究者が考えていた以上に、内容についての学びの深まりは、題材そのものだけでなく、授業の展開や教師の発問に左右されていた。

学んだ英語についての質問に対する結果からは、生徒が主に語彙を中心に学んだと感じていることが分かる。また、興味深いことに、本研究者が授業の学習課題として設定した文法事項よりも、教師が使ったり、生徒が自分の意見を表現するために使ったりした語句の方を圧倒的に生徒たちが「学んだ英語」として選んでいることが分かる。さらに、数は少ないが、グループ活動で個別に本研究者が質問を受けてフィードバックした表現や文法事項について回答しているものもあった。従って、CLILによる他教科と連携した授業では、教師が生徒の学びを意図した文法事項よりも、生徒が自ら注目した語句や、生徒が自分で疑問に感じた表現や文法事項の方が記憶に残りやすいということが言えると考えられる。

他教科と連携した授業についての質問に対する結果からは、大半の生徒が良いと考えていたことが分かる。ただし、生徒たちの中には、内容を完全に理解したいという欲求があり、英語が難しいためにそれが阻害されることへの不安があると考えられる。その解消のために、多少のあいまいさには慣れさせるということに加え、教材の工夫や、教師が使用する英語の難易度の調整、効果的な日本語の使用など、生徒の理解への足場かけを増やす必要性もあると思われる。

授業の感想についての質問に対する結果からは、ほとんどの生徒たちが、教科横断ということや教師による教材の工夫によって、内容と英語を結び付け、協学を通して思考することを求められていたことについて、良いととらえていたことが分かる。また、「難しいけど楽しかった」という意見が複数あったことから、生徒にとって難しい内容や英語が動機の低下に結びつくとは一概に言えないということが分かった。むしろ達成可能な範囲で「チャレンジングな(和泉、

2009) 内容や英語を用意することは有用であると言えるであろう。

#### RQ8:

担当教員2人は授業についてどのような感想を持つのか

指導者のふりかえりから、教師が成果であると考えていることは2点挙げられる。1つはCLILにより内容の教師と英語教師が連携することは可能であり、それによって、生徒の興味・関心が高まり、単独で教えるよりも明らかに積極的に生徒が授業に参加しているなど、相乗効果が得られるということである。教師が伝えようとする英語も、日本語に比べ難しいからこそ、生徒たちが集中して聞き入っている様子が観察できた。もう1点は教科間の連携により、教材の工夫や授業の手法を学び合えるので、教師としての資質や授業実践のモチベーションを高められるということである。どの教科でも、またどの教師も、それぞれに教材の工夫や協学のやり方を研究してきている。しかし、今までそれらを共有する場が少なかった。今回実際に授業で共有したおかげで、お互いに学び合ったことがあり、今後それを別の授業でも応用することが可能であろう。

一方で、今後継続して実践していくにあたり課題となることとして考えられることが2点ある。カリキュラムの中での位置づけと、教員の意識である。他教科の教師はそれぞれ、自分の教科の持ち時間に加えて、授業時数が増えた形で英語との連携授業に応じてくださった。これは今回が単発の授業であるので実現したことで、これを継続して実践するためには、学校のカリキュラムの中に位置づけ、組織全体で行う必要があるだろう。また、教員が教科間連携に意義を見出しているか、その熱意はどのくらいか、ということによって教材研究などの授業準備の質と量が変わってくるだろう。まずは多くの先生方に、CLILにより連携することによって授業が豊かになり、ひいては生徒の学びがつながり広がりを持つようになるということを観察や体験によって実感していただくことが第一歩となると思われる。

## 7 まとめ

本研究ではCLILにより英語の教師が他教科の教師と連携した授業を試み、その実践の過程と生徒及び教師への効果を検証した。その結果、CLILにより他教科の内容と英語を統合し、思考を刺激しながら協学により授業を展開したことによって、生徒にとって授業での学びが教科間でつながり、広がりのあるものとなるということが分かった。また、教師にとっても、お互いを刺激しあい、授業力を高めることができる試みとなることが分かった。

栃木県の公立高等学校における英語授業では、本研究者の授業も含め、未だ語彙や文法等についての分析的説明や和訳に多くの時間が費やされ、生徒の体験的学習が不足している。また、体験的学習を中心とした授業においても、その体験の質が教育的営みとして十分に生徒の興味関心に合った、課題解決力を育むものとなっているかについては疑問が残る。それには教師の多忙なことや研修機会の不足など様々な理由があり、すぐに改善することは難しいかもしれない。しかしながら本研究を通して、実は自分の周囲に豊かな内容を持った他教科の教師が存在し、教師同士も学びあうことによって、目の前の生徒たちに合った興味深い授業を実践し、学びを深めさせることができるということが分かった。特に、本研究者は、これまであまり知らなかった、連携した他教科教師の自分の教科に対する熱意に刺激を受け、力を借りることで自分の授業力が思いがけず向上するという経験をすることができた。

このような教科横断的な学びを継続的に実現させていくためには、本研究で行った以外の教科とも連携し効果を検証することや、学校全体での取り組みを推進することなどが必要である。新学習指導要領で求められる「主体的・対話的で深い学び」実現の一助となるよう、今後もさらなる実践を続けていきたい。

## 謝辞

本研究の機会を与えてくださった、公益財団法人日本英語検定協会の皆様と選考委員の先生方、特に助言者となりご指導くださった和泉伸一先生に、篤く御礼申し上げます。和泉先生からの貴重な助言無しに本研究は遂行し得ませんでした。また、宇都宮南高校の先生方と生徒の皆様には本研究にご協力いただき、ここに心より感謝申し上げます。特に磯寿人先生、遠井努先生には共に授業者として多大なるご支援をいただきました。最後に、CLILによる授業実践について長年ご指導くださっている宇都宮大学の山野有紀先生にこの場を借りて深く感謝申し上げます。

## 参考文献(\*は引用文献)

- \* Coyle, D., Hood, P., & Marsh, D. (2010). *CLIL: Content and language integrated learning*. Cambridge: Cambridge University Press.
- \* Genesee, F., & Hamayan, E. (2016). *CLIL in context: Practical guidance for educators*. Cambridge: Cambridge University Press.
- \* 池田真(2011).「CLILの基本原則」渡部良典・池田真・和泉伸一(共著)『CLIL(内容言語統合型学習):上智大学外国語教育の新たな挑戦—第1巻 原理と方法』1-13, 東京:上智大学出版.
- \* 池田真(2013).「CLILの原理と指導法」『英語教育』第62巻第3号, 12-14 東京:大修館書店.
- \* 池田真(2016).「CLIL活用の新コンセプトと新ツール」池田真・渡部良典・和泉伸一(編)『CLIL(内容言語統合型学習):上智大学外国語教育の新たな挑戦—第3巻 授業と教材』1-29東京:上智大学出版.
- \* 和泉伸一(2009).『「フォーカス・オン・フォーム」を取り入れた新しい英語教育』東京:大修館書店.
- \* 和泉伸一(2016a).『第2言語習得と母語教育から「言葉の学び」を考える』東京:アルク.
- \* 和泉伸一(2016b).『「フォーカス・オン・フォーム」とCLILの英語授業～生徒の主体性を伸ばす授業の提案～』東京:アルク.
- \* 文部科学省(2018a).『高等学校学習指導要領(平成30年告示)』
- \* 文部科学省(2018b).『高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説 外国語編 英語編』東京:開隆堂.
- \* 杉谷眞佐子(2010).『「EUの言語教育政策」関連事項の解説』大谷康熙・杉谷眞佐子・脇田博文・橋内 武・林桂子・三好康子(編)『EUの言語教育政策』1-8東京:くろしお出版.
- \* 笹島茂(編)(2011).『CLIL 新しい発想の授業』東京:三修社.
- \* 築道 和明・宇都宮正朗・馬本勉・五井千穂・河野省治・立川三・鳥生典江・藤本幸伸・宮本隆昌・森眞二・Joseph Lauer(2017).『*Vivid English Communication I*』東京:第一学習社
- \* 山野有紀(2013).「小学校外国語活動における内容言語統合型学習(CLIL)の実践と可能性」『*EIKEN BULLETIN*』vol.25, 94-126 東京:公益財団法人日本英語検定協会
- \* 山崎勝(2013).「CLILを使った「異文化理解」の授業実践と課題」『英語教育』第62巻第3号, 30-31 東京:大修館書店.
- \* 吉田研作(2017).「これからの日本の英語教育の方向性」坂本光代・渡部良典(編)『応用言語学から英語教育へ 上智大学英語教授法 TESOL コースの過去・現在・未来』122-135 東京:上智大学出版